



## 「人生の点滴」を仰ぎつつ

モーツァルトへの手紙 (その26)

会員番号 K.618 加藤 明



古いジャズのスタンダードに「All the things you are」というラブソングがある。

多くのミュージシャンがこの曲をカバーしているが、筆者がかつてよく聴いたのはトニー・ベネットの伸びやかな歌声だったか・・・。「きみは我がすべて」、「すべてはあなた」といった訳があるけれど、人生は大なり小なりこの「All the things you are」の心意気で他者と向き合うことが必要なんだと考えてきた。我がモーツァルトの歩んだ過程にあっても正に「All the things you are」の精神なくして成しえなかった多くの傑作をあげることができる（シカネーダーと組んだ「魔笛」はその好例であり頂点だろう）。

さて、今回で50号の節目の会報、相も変わらずフラフラ愚考を重ねてペンを手にした。



モーツァルトよ、あなたを意識的に聴き始めて30余年の月日が経ちました。

そして、ついに病?が高じ、あなたの音楽をどんなカタチであれ「ナマで聴きたい」という途方もない願望が実現した1995年（平成7年）12月からすでに、29年が経過したことになります。

ほぼ30年に及ぶ『モーツァルト広場』でのこの間の様々な出来事については、時より年二回発行の会報でも綴ってきましたが、やはり特筆

すべきは日本を代表するピアニスト、久元祐子さんとの出会いとその後の女史からの熱心なご支援を継続的に得られたことでした。

創成期の『広場』を振り返ると、第3回のサマーコンサートに初登場の久元さんの「ジュノム」k.271の演奏は正に決定的でした（「ジュナミ」とも表記される）。

この21歳のモーツァルトの澁刺にしてメロディアスなピアノ協奏曲の演奏は、明らかにモーツァルトが『広場』に（そして、秋田に!）降臨した画期的な「事件」となりました（この「ジュノム」の選曲は久元さん自らのご希望でした）。

久元さんにはこの第3回以降、実に第14回のサマーコンサートまで連続12回のご出演をいただき、秋田の多くのモーツァルトファンを魅了して来られたことに敬意と感謝そして心からの拍手を送って止みません。

小生は久元祐子さんと出会って以来今日まで、必然的にいわば「追っかけ」を任として参りましたが、その「追っかけ」のカタチは女史のCDを買い求め、ドキドキ感満載の張り詰めた傾聴が主でした。

そしてその都度、12度に及ぶ秋田での惚れ惚れするモーツァルトのソナタや室内楽、協奏曲

の演奏とウィットに富んだレクチャーを思い起こしては、当時のCDを懐かしんで聴いて居たものでした。

それは、日常での豊かな音楽空間を独り占めできる、とても贅沢な時間でした。



さて、あまり遠くに出歩くことのない小生に昨年の秋口、久元さんから「モーツァルト・ソナタシリーズ第5集」の演奏会へのご案内がありました。

この11月23日に開かれたモーツァルトチクルスの最終演奏会に、久元さんから丁重なるチケットを頂いた小生は、少年のように(たぶん)胸を躍らせながらサントリーホールに馳せ参じたものでした(女史のお好きな秋田の銘酒をお土産に)。

小生にとって、この日の聴きどころは何をおいてもk.533/494のソナタ。

初めてのベーゼンドルファーによる、初めてのk.533/494とは・・・。

誰のためでもなく、何かに(恐らくモーツァルト自身に)執り付かれたような深い余韻が特徴的であるこの異端のソナタを、久元さんが飾ることなく虚心坦懐に弾き終えたとき、小生はしばし呆然、「このままじっとして欲しいなあ・・・」と心底願ったものでした(次にすぐ移らないで!もったいない・・・と)。

このソナタにはモーツァルトが第3楽章のロンドk.494を書いて出版してから、約一年半後に独立した「アレグロとアンダンテ」という二楽章構成のピアノ曲を出版したのだが、この二曲を言わば合成して一つのソナタとして新たに世に送り出されたという特異な経緯が宿されている。

このことを一種の創作上の「熟成期間」と見るか否かはともかくとして、どうやら小生に長く吹っ切れない「難曲」というイメージを植え付けた理由は、こうした合成曲的な要素に負う

のかもしれない、と考えておりました。

彼のピアノソナタでは他に類例のないことに違いありませんが、小生には第三楽章の終曲部の消え行くような閉じ方にドキッとした体験がありましたし、第一楽章の冒頭から、それまでのソナタにみられる「関係性」を断ち切ったかのような内省的な響きにも違和感というか特別の思いを抱えもっておりました(このソナタの少し後に出版されたk.540「ピアノのためのアダージョ」ロ短調を連想したものです)。

そんな別格のソナタに対峙できるチャンス、しかも「久元祐子のピアノ」ということで、きつと、あの20分の演奏を一音たりとも漏らすまいと視聴した結果、一気に名状しがたいコンプレックスが体内に立ちこもってしまったのです。

久元さんの卓抜した演奏で改めてこの「難曲」の意味するところを模索したくなってしまう、すぐには次のプログラムに移らないでほしいとか、一旦間を置くためにホールから外に出たいな、といった衝動を憶えたほどでしたから。

その後「モーツァルトには珍しく、あのソナタには聴き手が存在しないんだ」といった小生なりの結論というか納得が得られるまで、しばらくの時間が経過し、今日に至っております。



モーツァルトよ、日々あなたへの接近を試行している小生ですが、相変わらずあなたを「知る」努力の割には「分かる」という成果が覚束ない思いであります。

『そんなに簡単にオレのことが分かってたまるか!』といった叱責をあなたからもらいそうですが、一つだけ人間モーツァルトの実像に迫るポイントをいうならば、あなたの短かった35年11ヶ月の生涯において、燦然と輝く「実存性」という点で他のどんな作曲家とも異なる偉大なる特性を見出すことができます。

かつて、厳父レオポルトがアウグスブルクから勘当同然の状態でザルツブルクに舞い込んだこと、そこで宮廷音楽家として職を得たことがあなたの生涯を決定づける大きな要因だったことは今日では多くのあなたの信奉者は知っています。

あなたのウィーンでの独立した作曲（演奏）活動の原動力は、レオポルトの故郷を棄て出奔した自立の精神を再興し体現したかのような、己の力で明日を切り拓くといった凄まじい「実存性」（「自由」の体現）そのものではなかったでしょうか？

一介の宮廷音楽家として当時の慣習に染まり、己（の才能）を埋没させることを嫌い、新たにウィーンでの独立を「選択」という離れ業をやったのけたあなたは10年後に病に斃れるまで、その「選択」の体現化を止めることがなかった。

あなたは言うならば、「自立」（「自由」と置き換えてもいい）と「関係」という実存の本質を小生に示唆し、そのことが一層小生をあなたの信奉者として刺激し、高め、深めていくことになったと認識してきました。

宮廷内では得られぬ「自立した人間同士の関係を軸とした日常性」を殆ど無意識に習得しモノにしながら、多くの仲間・演奏家・パトロンなどと今に伝わる有機的な関係を構築し、ヴァリエーションに富んだ傑作を生み出したのですから。

そう考えると、貴族社会のほころび、崩壊の兆しが見え始めた時代背景も無視できないのですが、劣悪な環境のなかでのあなたの限りない音楽的創造、とりわけ数多くの秀逸なオペラ作品がもつ意義の大きさに改めて気づかされるのです。



モーツァルトよ、あなたにとって音楽することはそのまま「善く生きること」だった。そして

て、おそらく無自覚的に「善く生きること」を実践した結果、小生にとってあなたの創造した音楽は、いわば「人生の点滴」、眼には視えない秘薬として存在し続けているのです。



待ちに待った前述の久元祐子さんの「モーツァルト・ソナタシリーズ第5集」サントリーホールでの演奏会CDが手に入ったのは今年の春でした。

『栄光のモーツァルト』という冠が付された金字塔と言うべき記念のCD、このモーツァルト・ソナタの最終演奏盤を小生はあのサントリーホールでの興奮を思い起こしながら、何度も何度も聴き込んだことは言うまでもありません。

当日のアンコール曲、意表を突かれたリスト編曲の「アヴェ・ヴェルム・コルプス」がステージから流れた時の震えるような感動を再び思い起こし、改めてこうべを垂れる思いでした。

こうしてサントリーホールでの感動を引きずりながら、小生は一つの確信を得るに至りました。

それは、久元祐子という現代のモーツァルティアーナこそは「善く生きること」を体現し続けている稀有な音楽家に違いないのだ、というシンプルな結論でした。

久元女史のさらなるご活躍をお祈りする所以です。 end

## 東山魁夷とモーツァルトの音楽（下）

会員番号 K.203 松田至弘

ドイツ・オーストリアの旅を終えた東山魁夷は、膨大なスケッチをもとに数々の作品を制作した。それは古い町々の古風な家・聖堂や尖塔・窓や看板、あるいは山上に聳える古城・湖などであるが、みごとに描かれたその絵を見ると、どこかほっとさせられ心を癒される。

そんななかに、「森の幻想」（97.0×146.0センチ）という注目すべき作品がある。一見すると、暗く淋しい不思議な森が絵の大部分を占めているが、奥の方にろうそくの明かりのもと、四人の人物がほのかに見える。これは、モーツァルト作曲のオペラ「コシ・ファン・トゥッテ」（K.588）の幻想なのだ。

中央の白いドレスを着た女性二人は、フィオルディリージとドラベッラの美しい姉妹、それぞれと手を取り合っているのは、婚約者の士官グリエルモとフェルランドであろう。愛の本質を追求するアイロニーを込めた滑稽な物語が展開されようとしている。モーツァルトの美しく哀しい音楽が、軽快に流れてくるように思える。

モーツァルトは、ダ・ポンテ（1749～1838）の台本によってこのオペラ・ブッフア「コシ・ファン・トゥッテ」を作曲した。この作品は人間の心理（愛や嫉妬や裏切りなど）を実にみごとに描き出した傑作である。「フィガロの結婚」と「ドン・ジョヴァンニ」、それにこの作品を加えて、モーツァルトの三大オペラと言わ



モーツァルトのオペラ「コシ・ファン・トゥッテ」のレコード（オトマール・ズイトナー指揮、ベルリン国立劇場管弦楽団・合唱団、日本コロムビア）（加藤仁氏提供）

れている。

魁夷はオペラが大好きだった。すみ夫人によると、「コシ・ファン・トゥッテ」は、何度も観にいったオペラだという。

魁夷はおそらく、現実の森を描いていて、このオペラのある場面と音楽をふと頭に思い浮かべたのであろう。その結果、森は現実の森から幻想的な森に変えられることになり、この幻想的でメルヘン的な雰囲気絵が生まれたのである。

「森の幻想」の制作年は1971年である。そして、これと連動するかのよう次の年、魁夷はその年に描く作品の構想を考えている時、モーツァルトのピアノ協奏曲の美しい旋律を心に感じ、「緑響く」と題する詩情豊かな作品を制作したのであった。

\*

1991年、東山魁夷は83歳の高齢になったが、この年はちょうどモーツァルト没後200年に当たっていた。各国で記念の行事が行われたが、その情報を発信する国際オフィシャル・マガジン『モーツァルト91』（集英社）も登場した。

日本人のモーツァルト愛好熱もすさまじく、様々な企画が打ち出され実施されたが、そのなかに『月刊モーツァルト・クラブ』（東芝EMI）という名で10枚のCDを発行するおもしろい企画があった。そして、魁夷はそのうちの1枚の選曲を依頼されたのである。

女優の岸田今日子、漫画家の砂川しげひさ、小説家の辻邦生などモーツァルトに詳しい著名人が、その人らしい選曲をしているが、魁夷もまた大変個性的な選曲の仕方をしている。ピアノ協奏曲や交響曲、協奏交響曲などの第2楽章ばかり9曲を選んだのだ。



東山魁夷が選出したCD（復刻盤、ワーナーミュージック・ジャパン）

勿論そのなかには、「ピアノ協奏曲第23番イ長調」の第2楽章も入っていて、CDの題は『緑響く/東山魁夷』とされた。

魁夷はこのCDのために、大好きなオペラの曲を選ばなかった。選んだ曲はどれも心を安らかに癒してくれるものばかりである。おそらく

これらの曲は、魁夷がカセットテープに入れて就寝時に聴いていたものであろう。

年月が経過するとこのCDは廃盤になったが、リニューアルして復刻したものが、ワーナーミュージック・ジャパンから『東山魁夷が愛したモーツァルトの第二楽章』と題して発売されている。魁夷とモーツァルトを理解するための貴重な一枚である。

\*

東山魁夷は1999年5月15日、年齢90歳でその生涯を終えた。後日行われた「お別れの会」では、モーツァルトの音楽が会場に静かに流され、参列した多くの人々が別れを惜しんだ。

（注）『緑響く/東山魁夷』のCD

魁夷が選曲したCDは、大変ユニークである。それは、下記の9曲の各第2楽章ばかりを集めて構成されている。魁夷は「こんな聴き方もできますよ」という一つのサンプルを示してくれたように思えてならない。

- ① 「ピアノ協奏曲第20番ニ短調」（K.466）
- ② 「フルートと管弦楽のためのアンダンテ」（K.315）
- ③ 「ピアノ協奏曲第23番イ長調」（K.488）
- ④ 「交響曲第40番ト短調」（K.550）
- ⑤ 「ピアノ協奏曲第21番ハ長調」（K.467）
- ⑥ 「ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲変ホ長調」（K.364）
- ⑦ 「ピアノ協奏曲第19番ヘ長調」（K.459）
- ⑧ 「フルートとハープのための協奏曲ハ長調」（K.299）
- ⑨ 「ピアノ協奏曲第24番ハ長調」（K.491）

## 『サブ』

会員番号 K.375 安藤正昭

山本周五郎の『さぶ』は好きな作品の一つである。

物語は、数々のトラブルに巻き込まれながらも、艱難辛苦の中で懸命に生きる「栄二」のことだけで終始している。

まだまだ若い頃の話である。

土曜日の夜に小さな居酒屋で、常連客の某出版社編集のS嬢に誘われた。「この店の後、私と付き合って！」と言われて、鼻の下が長ーくなってしまった。

連れて行かれた所は、地下鉄駅通路と階段の間沿いにあるジャズ喫茶かな？ジャズ・バーかな？。タバコの煙が充満する中、元来アルコール類には弱いので、薄い水割りを注意深く舐めながら生演奏に聴き入っていた。終電の時間を気にしながらも、気持ちはいよいよ昂っていたのだが、ハタと気が付いた。

先程までカウンター脇で皿洗いをしていた若い女性が、ピアノを弾いている。ドラムも違う人である。ベースは先に来ていた客に間違いない。そのうちに、隣のテーブルにいた客が、モソモソと楽器ケースから取り出したクラリネットを組み始めていた。客と思っていた人が入れ替わり立ち替わり演奏しているのである。仕事を終えたプロのミュージシャン達が集まってき

て、ジャムセッションしているお店だったのだ。演奏しているどの曲もどの曲も全く知らないのだが何とも心地よく、楽譜も見ずにお互いの顔を見合いながら、お話でもするように音で遊んでいるということに、驚きと感動であった。Jazzとは言わないにしても、たぶん、作曲家とか呼ぶ人が存在しない昔から、バロック時代から、バッハやその後のモーツァルトだって、王侯貴族の邸宅やサロンなどで、このように即興で演奏をしていたものと思われる。とてもハッピーで、貴重な音楽空間であった。

帰る時間になって、若い演奏者達を育てているという元ベース奏者の店長N氏が、ピアノトリオによるLPレコードをかけてくれた。小気味よいノリノリのアドリブと左手の重厚な低音に、身体の深部までを揺らされた。珠玉の「枯葉」だった。店長がメモってくれたレコード名は、『Concert by The Sea』、Erroll Garnerライブ録音盤（1955年）であった。勿論レコードは廃盤で、何年も経ってからCDを入手したのであるが……。

結局、鼻の下を取めて、何事もなく朝の始発電車で帰ったのだった。（^\_^）

そのお店の名前は、大阪谷町九丁目『サブ』である。

## 『モオツァルト』と「モーツァルト」

会員番号 K.332 片岡 元

### ●モーツァルト論の変遷

「モオツァルト広場」をお手伝いをする事になっておよそ30年、毎年素敵なこだわりを持ったプログラムによるライブに接することができるのはこの上ない喜びである。

モーツァルトは音楽家はもとより、文学者、哲学者に至るまで、大変多くの人間に愛されているから、評論や解説もたくさん存在する。誰にとっても「天才」は、理解したいし、少し同化もしたくなり、知り合いのようにもなりたい対象なのだ。

その評論のほんの一部を学生の頃から拾い読んで、また後で読もうと保管したものがいくつあるのか、個人的目線で整理してみようと思いついた。

選んだものは、ボリュームのある単行本ではなく、ささやかながら本音が窺えそうな対談や文庫本等で、年代順に並べると以下の通りである。

1. 『Der passionierte』  
高橋英夫「ユリイカ：バッハ特集」1978年
2. 『モーツァルトと20世紀』  
対談 遠山一行+高橋英夫「音楽の手帖」  
1979年
3. 『アマデウス』  
M.フォアマン 映画（DVD）1984年
4. 小林秀雄の『モオツァルト』  
海老澤 敏 日経新聞コラム 1993年

### 5. 『小林秀雄とモーツァルト』

対談 栗津則夫+高橋英郎「音楽現代」

2021年

### ●評論『モオツァルト』の変遷へ

年代順に拾い読みする理由は、その時代それぞれの評価があるだろうからモーツァルト像の変遷を確かめることができると考えたからである。

しかし、読んでいくにつれ、小林秀雄の評論『モオツァルト』が、対談のほとんどに（バッハの評論にまで）、言わば執筆者の「当て」に取り上げられているのに驚いた。

その結果、「モーツァルト」像ではなく、『モオツァルト』、つまり小林秀雄の評論の影響力の大きさを確認する作業になってしまった。

なお、高橋英夫氏と高橋英郎氏はもちろん別人で、英夫氏は独文系の文芸評論家、英郎氏は筆者が在籍した大学でフランス文学部助教授に就かれておられ、モーツァルト研究者として有名で、アンリ・ゲオンやスタンダールの貴重な評論を紹介されている。

高橋先生は、惜しくも9年前に他界されたが、この機会に翻訳されたモーツァルトの資料も改めて読み直して先生の在りし日を偲びたいと思う。

●「モーツァルト」5つのエピソード概略

1. 『Der passionierte』（「情熱的な人」という意味）高橋英夫 1978年

バッハを「情熱的な人」と讃え、その末尾は小林秀雄、堀辰雄、河上徹太郎を挙げ、日本の文学者のバッハへの言及不足を訴えていた。

有名なバッハの管弦楽組曲第2番（ロ短調）を挙げながら、「モーツァルトのト短調が tristesse allante ならばバッハの短調は悲しくはなく、人をただ無限の彼方へと牽引しつづける云々」述べている。

ト短調＝「悲しさ」と紹介している小林秀雄の『モーツァルト』を前提として、バッハの解釈を論じていたのでここに取り上げたいと思った。

些細なことだが、短調＝tristesse allante＝「悲しさ」というのが一つの概念となっていることが気になった。

2. 遠山一行 高橋英夫 対談『モーツァルトと20世紀』 1979年

2人で、小林の本がト短調の曲の評価を強調しているのはやや偏っていると指摘し、小林がハイドンセットは『魂』であると論じているところで、実は長調が多いと矛盾を指摘しあっている。

20世紀の大きな動きとしては、ザルツブルク音楽祭が始まったこと。（ホフマンスタール、R.シュトラウス、M.ラインハルトらが創設）各方面に刺激が与えられモーツァルトの再発見が

進んだ。

3. M.フォアマン 『アマデウス』 1984年映画（1979戯曲）

世界中で大ヒット。冒頭、錯乱した老サリエリが自ら首を切る場面のト短調から始まって、心憎い音楽・人物描写の満載で、オペラ場面の再現なども素晴らしい人気作品となった。

新規のモーツァルトファンが拡大した要因。専門家は賛否両論であったが、その後ピリオド奏法での再現や、文献などにおいてもさらに研究が進められたという効果もあった。

4. 海老澤 敏 小林秀雄の『モーツァルト』 1993年（『変貌するモーツァルト』所収 岩波現代新書 2001年）

『モーツァルト』を1946年の発刊時に買い求め「暗唱」したほどのファン。冒頭から小林宅へ訪問したエピソードに始まり、「小林没後数多くの評論が世に出たが、『モーツァルト』以上の成果を誰が成し得たのか」という小林賛辞で終わる。

所収している新書では、研究者として数多くの評論を網羅してモーツァルト像の客観的解釈を追求している。それは、心酔する小林の『モーツァルト』を支持しつつ、文芸的な批評に対し、物証を提示する正当的な音楽論を世に問う姿勢と感じられた。

海老澤氏は、日本モーツァルト研究所所長である。

## 5. 栗津則夫 高橋英郎 対談『小林秀雄とモーツァルト』 1996年

テーマが小林秀雄論そのもので双方本音の覗く内容が面白い。

英郎氏は、『モーツァルト』発刊当時、日本語で音楽評論が可能であることを衝撃とともに知ったという。

また、小林が従軍の際アンリ・ゲオンの本を携行していたというエピソードや、終戦の日本が音楽に飢えていた時代に書かれたものという時代背景も改めて確認できた。

小林の論点が器楽曲、交響曲の一部にとどまりモーツァルト本筋のオペラは対象外であることも問題視していた。

### ●『モーツァルト』その影響力の凄さ

これらを読んで驚いたのは、バッハ論にまで「小林秀雄の『モーツァルト』」の短調表現が比較引用されていることであった。

これらのことは、『モーツァルト』が1946年に世に出て以来、「同業者」に無視できないインパクトを与えたことを物語っている。また一方で、『モーツァルト』に対して、独特の物足りなさを表すニュアンスがつきまとっていることに気づかされる。

つまり、『モーツァルト』は、音楽的な解釈よりも文学的アプローチが主体となり、主観・直感によるものであるため、資料の翻訳に従事した側からはモーツァルト論としては偏ったものという印象になるのだろう。

下世話な表現になるが、英郎氏は小林のモーツァルト論だけではまずいと考えて、スタンダール、アンリ・ゲオンの翻訳に向かったのではないだろうか。

小林は一種独特な日本語感覚で深みがあるように論じるが、過去の先達者の言い回しに頼っている。その原著を開示することで、多様なモーツァルト像が多くの人に想像できるのは価値のあることと言える。

一方小林に若くして傾倒・心酔した海老澤氏も、モーツァルトが旅した後を実際に旅行し、その足跡に応じた研究をなし、ともすれば悲劇性や毒殺説のある作曲家の真実について、実態を明らかにしようとする研究を行なっている。

### ●『tristesse allante』実は「長調」を形容していた？

小林秀雄のとても有名な言葉に tristesse allante = 「かなしさは疾走する。涙は追いつけない」というフレーズがある。ほとんどの読者はここで魅了されてしまう。

この文言はアンリ・ゲオンからの引用だが、ゲオンはまず、フルート四重奏曲ニ長調K.285の第一楽章を指して「足取りの軽い悲しさ」『tristesse allante』と書いた。また「爽やかな悲しさ」とも。

つまりゲオンにとってその印象は、長調のこの曲から受けたものであり、それは「涙の追いつかない哀しみ」とはやや異なるイメージのようである。

さらに文中でゲオンは、この二長調K.285を聞いたときに、弦楽五重奏ト短調K.516の第一楽章Alegroの旋律を耳新しい音として連想させたとなっている。

そして「晴れやかな陰翳という点から見ればそれはモーツァルトにしか存在しない」と続けたのであるが、小林は『モーツァルト』で、このト短調クインテットを「疾走する哀しみ」と表し、「涙は追いつけない」と加えた。

これが、モーツァルトの曲の真価は短調にこそありというイメージを日本に定着させた要因のようである。

しかしながら、ゲオンの感じたように、フルート四重奏曲二長調の曲を聴いて長調の「足取りの軽い悲しさ」を感じてみるのも、モーツァルトの魔力を感じるヒントになると思える。

例えば、ヴァイオリンソナタはほとんどが長調である。じっくり聞いてみると、アレグロ楽章はまさに「爽快な悲しさ」「駆け巡る悲しさ」が随所に感じられ、涙無くしては…という曲ではなさそうである。

なお、高橋氏は本人の著書で、小林が「allante」を「疾走」と充てたのに異議があるとしている。

### ●日本人の『モーツァルト』

自分流の整理を行なう中で、ほとんどの方々が『モーツァルト』の評価の高さの一つに、小林の魔術的に巧みな言語表現をあげており、音楽を語る日本語表現の凄さに驚きを持っていたことも印象的であった。これは私見であるが、

自身が数十年前に翻訳していた高踏派詩人ランボーの影響があったからではないだろうか。

しかしながら後々の研究の功績で、アンリ・ゲオンやスタンダールの評論を読むことができる今日、その膨大な情報量と鑑賞実績（スタンダールは『フィガロの結婚』を、当時100回以上観ていた！）を前にすると、『モーツァルト』にどうしても物足りなさを感じる。

やはり音楽や美術は、その歴史を西洋に発しているため、極東の我々は実物を鑑賞する経験もなく、当然オリジナルの目線で描くことは限界があるかもしれない。

従って『モーツァルト』は、やはり「音楽に飢えていた時代」の日本人のためのモーツァルト論であり、かの大戦後の混乱時代に備えられたものだが、現代のモーツァルト鑑賞者である私達にとって、遡っても通過すべき偉大なランドマークなのである。

現在、音楽は多様性を持ち、「飢え」から「豊潤」な状態にある中、モーツァルトの響きはさらなる広がり止めないと思うが、文豪スタンダールの言葉はやはり今日を予言しているのだろう。

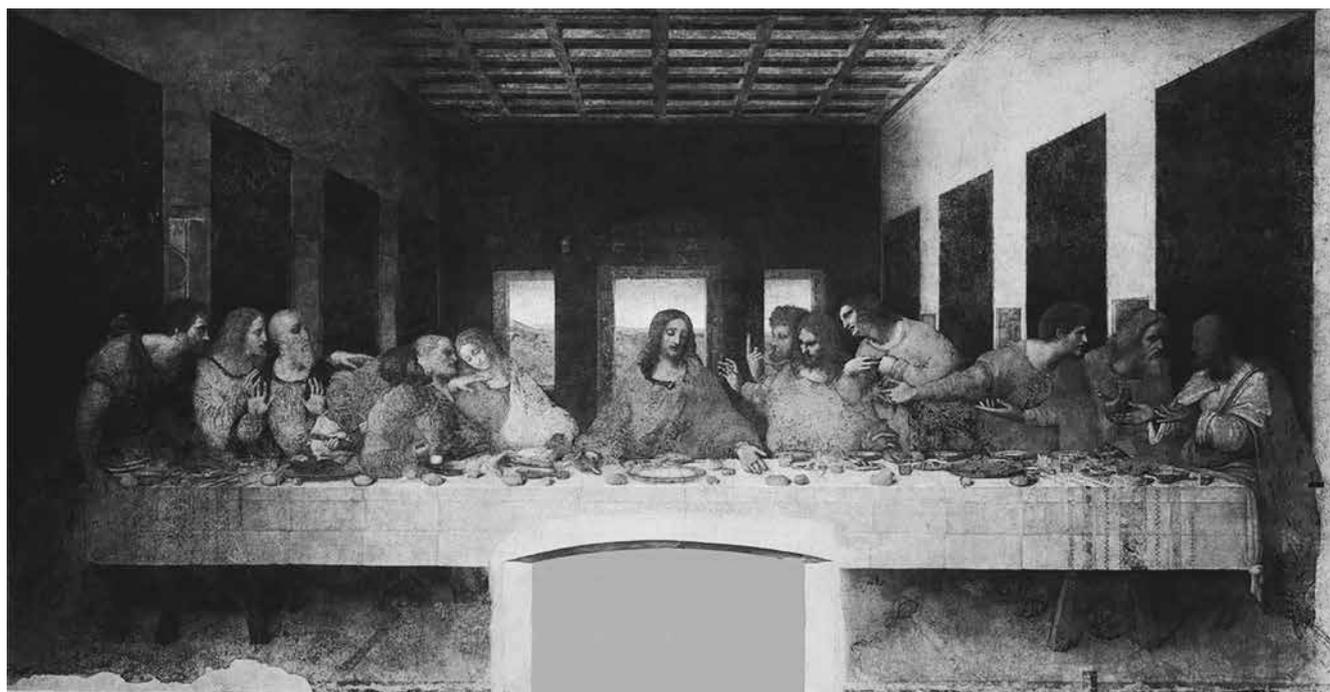
「モーツァルトは、この世に感じやすい人びとがある限り、不朽の名声をかち得たのだ」

（『モーツァルト』スタンダール 高橋 英郎 訳）

## 酒とモツの日々 (50)

会員番号 K.488 佐藤 滋

この稿もついに50回。もう後が無いということで、最後は「最後の晚餐」とモーツァルトについて。私がダ・ヴィンチの名画を初めて見たのは4歳の時。幼稚園のホールに掛けられていた複製画でした。4歳の凡児に絵の意味がわかるはずはありません。園長先生がどんな思いで一番目立つところに、さりげなくこの絵を掛けておられたのか、今となっては確かめるすべはありません。教育と称して作品を指導解説するのではなく、ただ存在そのものに語らせる。何かわからないが崇高なもの、近寄り難いもの、同じ絵でもポスターや児童画とは明らかに違うものが身近にさりげなく掛かっている……。多くの園児が心の奥に記憶したものが、やがて芸術として年齢と共に心のなかで発酵してくる。今にして思えば幼稚園とは、とても幸福な「芸術」との出会いの場所でした。



年をとってから、この絵で気づいたこと。顔の表情は何か演劇的でつまらないのに反比例して手の表情の豊かなこと！例えば向かって左側にユダがいますが、彼は横向きでイエスを見ており、表情はもちろん、何を考えているのかもわからない。けれども彼の右手はイエスを売った銀貨をしっかりと握っており、左手は蛇の鎌首のようにイエスを挑発している。一方イエスは、顔からは何も読み取れないが右手はユダと同じ手の形で真っ向から対峙している。そして左手は鑑賞者に差し出されている。この意味は？

名画は見る者との会話を可能にします。どれだけ多くの人が、この絵に慰められ、励まされ、癒やされてきたことでしょう。イエスの、30代にしては皺の多い手、けれども柔らかく肉付きの良い手が見る者に語りかけてきます。「私は今、弟子たちと食事をしているが、次はお前の所に行くよ。待っていないさい・・・」と。

顔の表情はどんなに複雑な感情であっても一つに集約される。(顔の左右で表情を変えることはできない) けれども「最後の晩餐」でのイエスの両手は左右全く別の表情を持っている。それを統括する顔は無言で無表情だが、手が雄弁にイエスの相反する思い、「怒りと愛」の感情を表しています。

モーツァルトの上品な肖像画の表情に惑わされてはいけない。顔は社交の道具だが、手は生活の苦渋に向き合っている。その手によって記された音楽には、冗談や笑い声で隠しきれなかった葛藤が込められている。

モーツァルトの華麗な旋律、甘美な響きに惑わされてはならない。それは曲の外向きの「顔」にすぎない。神は細部に宿るごとく、モーツァルトの本音は職人的な手仕事(意外な転調、隠された対旋律、意表をつく構成)に表れている。

モーツァルトを聴くときは、解説によって意味づけるのではなく、園児のように素直に向き合いたいと思います。素直な耳には、きっとモーツァルトはイエスのように左手を差し伸べてくれるでしょう。人生を仕切る右手に隠れ、楽譜を書く右手を見つめながら、不浄な物に触れ、伴奏に徹してきた左手が、そっと貴方に語りかけてくれるはず。

「僕が好き？」と。

## 事務局より

先月のことです。20年前まで毎月集まってはトロンボーンアンサンブルをしていた4人で静岡県のとある演奏会にお邪魔してきました。旧知のメンバーなので練習は前日のみ。今回は我が家の3番目(高校1年生)が新メンバーとして加わりました。トロンボーンを吹き始めてまだ半年、でも十分に戦力だと周りのメンバーから言われ本人もご満悦。そし

と一緒に吹けたことに僕も大満足。最後に「同じ楽器になってわかったけどお父さんって上手なんだね」の一言。今年で50歳になりましたがまだまだ引退はできないな。音楽は聴くのも吹くのも弾くのも楽しいですね。また楽しい1年が始まります。みなさまにとっても音楽にあふれた楽しい1年が訪れますように。

(K.575)